

これからの公立美術館のあり方についての調査・研究

財団法人地域創造では、平成19年度、20年度の2ヵ年で、公立美術館の現状と今後のあり方に関する調査研究を行いました。委員会メンバーによる検討から抽出された課題に対して、データ分析およびインタビューによる国内外の現地調査を実施し、マネジメント／ガバナンスという視点から、公立美術館の経営改革や他機関との連携、設置者による支援方策等の提言をまとめました。

< 報告書の内容 >

公立美術館の現状と課題

データをもとにした公立美術館の現状、設置の意義、抱えている課題などを抽出した上で、課題克服の着眼点を整理しました。

公立美術館の経営改革

組織経営の視点から見た美術館経営のあり方、地域特性や使命にあわせた経営形態の選択方法、また、地域再生や、創造都市論・創造産業論的視点、さらに文化政策からみた地域と美術館の関係について考察しました。

連携による事業展開

単館経営の限界と他館との連携の可能性、また、子育てや教育、福祉など地域内で他の公的機能を担っている施設とのパートナーシップについて、国内外の事例を交えつつ提言しました。

美術館支援方策

地域を超えた公立美術館同士の連携を支えるために、常設の支援体制（協議会やプロが集う会員組織）が必要です。今回は海外の先行事例を分析するとともに、日本における組織モデルやあるべき機能などを提言しました。

報告書は地域創造のホームページ（<http://www.jafra.or.jp/>）にも掲載しています。

お問い合わせ

財団法人 地域創造

TEL.03-5573-4050

〒107-0052 東京都港区赤坂 6-1-20 国際新赤坂ビル西館 8F



財団法人 地域創造
Japan Foundation for
Regional Art-Activities

財団法人地域創造は、地方公共団体関係者が中心となり1994年に設立された公益法人で、地域に根ざした文化・芸術活動をサポートするために、全国の地方公共団体に対する財政支援、研修交流、情報提供、調査研究など様々な事業を展開しています。



これからの
公立美術館の
あり方についての
調査・研究

館長・学芸員の方々へ

財団法人 地域創造

これからの公立美術館のあり方についての調査・研究委員会

問題提起 **01**

来館者と“対話”していますか？

美術館は来館者あってこそものです。あなたは、あなたの美術館の「お客様」についてよく知っていますか？ 素敵な作品や立派な研究成果を人々のもとに届けるためには、来館者と直接向き合うことが大切です。一方的なレクチャーだけでなく、フロアに出て「対話」してみませんか。

問題提起 **02**

あなたの美術館の収集方針（コレクションポリシー）を説明することができますか？

収藏品の中には、あなたが愛してやまない作品があることでしょう。一方で、価値が良くわからない作品もあるかもしれません。いずれにしても、あなたには美術館が全体としてどういう作品を取り揃えているのか、コレクション全体の価値を語る事が要求されています。個々の学芸員の「好み」や「得意」な分野にかかわらず、館としての収集方針（コレクションポリシー）をはっきりさせ、共有化しましょう。

問題提起 **03**

展示を超えてアートの持つ力を引き出せていますか？

美術を作家や作品としてのみ捉えるのはもったいないことです。アートは様々な分野をつなぎます。科学、歴史、文学、演劇、ダンス、音楽、建築、医学、自然、経済、政治など多様な要素に目を向けながら、その力を生かしていきましょう。そうすることにより、社会全体がその恩恵を受け、美術館はその存在感をより増していくでしょう。

問題提起 **04**

地域の魅力、認識していますか？

忙しさのあまり、毎日の生活が家と美術館の往復だけになっていませんか？ 美術館をとりまく周囲の地域には、豊かな自然や歴史、文化があります。灯台もと暗し、とよくいいます。周辺の地域を歩いてみませんか。歩き、人々と語ることで、美術館での仕事に生かせる興味深い人や事物にも気づくはずです。

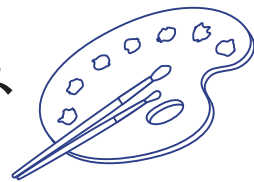
10

公立美術館と地域・人々の絆を深めるための

の問題提起

<館長・学芸員の方々へ>

美術館という場をどうとらえるか、関係者とどうかかわるのか。その見直しから改革が始まります。



公立美術館の多くは、少ない予算と人員で、ぎりぎりの活動をしています。大きな夢を描いたり、広い発想をするのが難しい時代かもしれません。しかし、そういう時代だからこそ、アートや美術館が社会にとってどんな意味をもつのか、深く考えてみませんか。そのために10個の問題提起をします。

問題提起 **05**

作業工程表を作っていますか？

あなたの同僚は、今日どこで何の仕事をしていますか。全員の作業工程表を作り、日々更新し、共有化しましょう。美術館という大きな船は、クルー全員が協力しなければきちんと動きません。お互いに助け合って業務をこなしましょう。チームワークがうまくできれば、誰かに業務が偏ることもありません。また、若手もどんどん育ちます。

問題提起 **06**

他業種のプロを何人知っていますか？

美術の研究者として同分野の「プロ」をたくさん知っていることは大切です。しかし美術館をより良く運営するためには他業種のプロの力も必要です。世の中には集客、マーケティングや広報、あるいはイベント企画など様々なプロがいます。日頃から彼らとの付き合いを深めましょう。お互い学び合えます。また、いざというときにも助けてくれます。

問題提起 **07**

美術館で解決できない問題を、きちんと設置者に投げかけていますか？

美術館が抱える問題の全てを、美術館の中で解決するのは不可能です。設置者である自治体の各部門、特に予算・人事部署の理解と協力が必要です。こうした関係者と日ごろから対話をしていますか？ 展覧会に招待していますか？ 美術館側から仕掛け、みんなを美術館の「仲間」や「味方」にしていきましょう。

問題提起 **08**

評価制度や指定管理者制度の導入に対して意見を述べていますか？

評価制度や指定管理者制度と聞くと、いやな顔をするスタッフが多いようです。しかし、これらは単なる道具です。うまく使えば運営の役に立ち、下手に導入すれば混乱を招きます。大切なことは、こうした道具の使い方や設置者任せにしないことです。館長以下スタッフは、設置者に言われるまでもなく、よく勉強してください。そして、これらの道具を使うか否か、自ら意見を述べましょう。

問題提起 **09**

市町村長や知事は頻繁に美術館に足を運んでくれますか？

公立美術館の最大のスポンサーは利用者であり、住民です。そして彼らの代表が、選挙で選ばれた首長です。首長は常に有権者の意向を探っています。時には行政の論理を超えた大胆なアイデアも打ち出します。仕事ができる首長は美術館をそうした行政経営の“インスピレーション”を得る場として活用しています。年に2、3回でよいのです。首長を招き、展示を見ながら館長や館員と語ってもらう機会を作ってください。

問題提起 **10**

もし、あなたの美術館が廃止されることになったら、何人の市民が立ち上がってくれますか？

住民、利用者の中で、「美術館をかけがえのない場所だ」と思う人がどのくらいいるでしょう。あなたの中で「住民」や「利用者」が抽象的な存在になっていませんか？ 一人ひとりと顔が見える関係を築き、美術館の「当事者」をできるだけ多くすること。そのことが美術館の存在を確かなものにします。